

機関番号：35402

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520581

研究課題名（和文） 近世近代のたたら製鉄業者田部家の研究

研究課題名（英文） A Study on the Tanabe family, Tatara-style Iron-manufacturers in the Tokugawa and the post Tokugawa era.

研究代表者

相良 英輔 (SAGARA EISUKE)

広島経済大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：70124071

研究成果の概要（和文）：（1）近世前期(1600年代)、田部家の居住する吉田町での田部家の経済活動を明らかにすることができた。（2）近世中期、たたら製鉄を幕府が専売制にすることにより、生産者である田部家等の鉄師が苦境に陥ったが、その具体的な実態を明らかにすることができた。（3）19世紀後半（1850年代から1860年代）鉄の需要が拡大し、田部家も大きな利潤を得、資産を拡大していったことを明らかにし、さらに1865年吉田町は大火により町全体が焼失するが、その詳細な史料を見出し、全貌を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：Summary of the Research Results

(1)The economic activities in the period from 1600 till 1700 in the Yoshida —cho region ,where the Tanabe Family lived ,have been analyzed satisfactory.

(2)We analyzed concretely the economic difficulties experienced by the Tatara —style iron manufacturers such as the Tanabe , Sakurai , Itohara families and the other smaller families (9 families in total, including the above three).Their difficulties had been caused by the monopolization of iron and steel by the Tokugawa Government in the period 1780～1787.

(3)We analyzed the recovery process of the Tanabe family and the other iron manufacturers, in the period from 1850 till 1860 when the demand for iron increased. We also analyzed the detailed stories based on the exact data regarding the big fire of Yoshida—cho area in the year 1865.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
20年度	1,100,000	330,000	1,430,000
21年度	1,000,000	300,000	1,300,000
22年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：たたら製鉄、砂鉄、鉄穴（かんな）、銚（ずく）、鋤（けら）、鋼（はがね）、山内（さんない）、生産と流通

1. 研究開始当初の背景

田部家はたたら製鉄に関する1万8000点程の史料を所蔵する。平成19年田部家が

この史料を公開することになって、筆者は島根県雲南市を事業主体とし、文化庁が補助する目録作成事業の調査主任となったため、史

料の分析をする機会に恵まれた。そこで単に目録を作成するのみならず、史料分析の成果を出すため、科学研究費の申請をし、交付を受けたものである。

2. 研究の目的

1万8000点以上ある田部家文書のなかから、たたら史料の主なものを写真撮影し、それを分析することによって、300年以上にわたるたたら生産の歴史概要を把握する。特に今日までほとんど明らかになっていない近世前期のたたら生産の実態を史料にもとづいてできるだけ明らかにする。同時に、日本有数のたたら製鉄業者田部家の1600年代からの成長過程を明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 過去の研究成果を整理し、史料にもとづきそれを検証していく。
- (2) 主な史料10万コマを写真撮影する。
- (3) さらに特に重要な史料は翻刻作業を進める。
- (4) 世界史的観点を持ち、イギリス産業革命の視点をも持つ。
- (5) 松江藩のみならず、石見地方（幕領、濱田藩など）についてもたたら史料を分析し、松江藩との比較検討をする。
- (6) 九州地方のたたら史料についても可能な限り収集して分析していく。
- (7) 研究発表や論文発表をも積極的にしていく。

4. 研究成果

(1) 近世前期において田部家の居住する吉田町の町としての実態を史料にもとづき検証することができた。具体的には、明暦3年(1657)「飯石郡吉田村御検地帳」から当時の吉田町の存在を明らかにすることができた。町屋敷67筆の個々の敷地面積もわかり、さらに町年寄、目代などの町役人が明らかになり、その変動を知ることができた。67筆は土蔵や納屋の敷地も含まれるが、当時の売買文書を見ると、ほとんど「売申町屋敷之事」とか「永代売渡家屋敷」と出てくるので、ほぼ67軒の屋敷を構えた町の存在を推測できる。元治2年(1865)吉田町は大火によって町全体が焼失するが、その記録を記した「御用留」によると、焼失竈数(軒数)61軒、土蔵23軒、寺(西福寺)一軒等となっており、焼け出された人数は249人である。このことから、明暦3年(1657)から約200年後も町の規模はほとんど変わっていないことがわかる。さらにそれから約150年後の今日でも町の規模は

ほとんど変わっていない。山間地の町として350年の間、ほとんどその規模を変えることなく維持できたことは注目に値する。

(2) 近世前期田部家の経済活動を史料にもとづいて検証することができた。

明暦3年(1657)「飯石郡吉田村御検地帳」から、この時すでに吉田町の成立を知ることができるが、それから5年後の寛文2年(1662)綿屋(田部家)は、はじめて吉田町に進出したと思われる、町屋敷3畝、上畠2畝12歩を購入している。町の大半の者(45筆)は1畝15歩の面積を名請しており、綿屋(田部家)はそれよりやや大きい面積の屋敷を名請しているが、綿屋より大きい面積の屋敷は21筆あり、当時は綿屋がそれほど大きいわけではなかった。

しかしその後、綿屋は吉田町の家屋敷を次々に購入しており、寛文2年の家屋敷を含め、元禄5年までに8軒の家屋敷と畑1筆を購入している。そしてそのほとんどを借家になっている。近世前期から綿屋(田部家)は積極的な経済活動をしていたことがわかる。

(3) 田部家が吉田村一帯でいつ頃からたたら経営を行っていたかは定かでない。『金屋子神信仰の基礎的研究』によると、「田部家初の永代鉦(栗原鉦・正保3~貞享4)」とあり、「創業の際、その守護神として金屋子神を勧請」と記してある。正保3~貞享4年は1646~1687年である。栗原は吉田町木ノ下であり、田部家近世前期の古い墓があり、その可能性は高い。金屋子神社には棟札20枚があり、一番古いものは寛文5年のものという。

今回の史料調査で発見されたもっとも古いたたら関係文書は、寛文13年(1673)4月18日の「永代売渡申鑪山鍛冶屋山之事」である。これによると、綿屋五左衛門(8代)はこの時鑪山と鍛冶屋山、さらに鑪道具、鍛冶屋道具を包丁銀1貫950匁、外に包丁銀3貫目を貸す、という条件で購入している。

その後、貞享4年(1687)から翌年にかけて綿屋ではたたら経営に関する相続の紛議が生じている。その一紙文書によると、7代・五右衛門は吉田村の大次米(おおじまい)鑪(近世期の掛谷村と中野村に隣接し、大志度の隣)を操業していたが、五右衛門が亡くなって後、3年間はその子五右衛門(兄)と五郎右衛門が「寄合吹」(共同操業)することで引き継いだ。しかし3年後はお互い折り合いが悪く、五郎右衛門のみが操業している。しかし、鉄山については兄弟の五郎右衛門と五右衛門と「寄合山」として相続したかどうかで紛議になっている。

この一連の文書の中で、「式拾三年以前午年」より兄弟で三年間「寄合吹」したとあり、そ

れは寛文6年(午)であることがわかる。それ以前から父五右衛門(7代)は大次米鑪を操業していたことになるから、綿屋のたたら操業は寛文5年(1665)以前からであることがわかる。『金屋子神信仰の基礎的研究』では、田部家初の永代たたらを栗原鉦と記している。否定はできないが、その出典が明らかでない。文書史料から確認できる最も古い田部家のたたら跡は、今のところこの大次米鑪である。

ともあれ、貞享4年の田部家のこの紛議の決着は、貞享5年2月16日の一紙文書「覚」に記されている。綿屋8代・五左衛門、9代安右衛門と古山・五郎右衛門、西・五右衛門の親族が連署して、庄屋・利兵衛、目代・次右衛門へ差出したもので、「当米五十俵五左衛門、五郎右衛門より出シ、五右衛門方へ相渡シ、埒明申候」とある。

綿屋8代五左衛門は、五郎右衛門とともに兄五右衛門に米五十俵を差出して一件落着している。

(4) 近世中期のたたら経営

「鉄山旧記」によると、元禄4年(1691)松江藩でも天秤吹きが始まり、松江藩御札座による「御買鉄」(藩の専売)が始まったようである。元禄7年(1694)、松江藩は天秤鑪使用のたたらへの運上銀を3割増額するが(卜蔵家文書「諸控」)、このことは天秤鑪導入がたたらへの鉄生産量増大につながったことを示している。

しかし、経営規模の拡大は、大坂鉄問屋ほか藩外商人との結びつきを強め、しだいに前貸を受けながら鉄山経営を行うことにつながった。その結果、櫻井家は元禄末～宝永期に大坂鉄問屋に多額の借銀を抱え、経営危機に直面した。

この時期、鉄師たちも大量生産体制に対して生産者側からの販売体制が整わず、必ずしもたたら製鉄の経営は順調ではなかった。享保7年(1722)、御買鉄制下での鉄代銀の生産方法を巡り、藩と鉄師たち間で激しい対立が生じた。最終的には郡奉行が鉄師たちの「口上書」を受け取り、大原郡、仁多郡、飯石郡に出向いたことでこの「事件」は終息している。この「事件」は、鉄師たちが藩鉄方に対し必死の抵抗をし、それなりの要求を通したことをうかがわせる。

(5) 近世中期の田部家

田部家の9代安右衛門は、「田部家系図」によると、「此時鉄山益々繁盛、金銀如山、米穀満庫」で、「隆源院殿様御成奉入、鍛冶屋御上覧、拝戴御小袖」し、「田辺」を「田部」に改めさせ、「前綿屋」の「屋号」を名乗らせたという。

この時、安右衛門の兄弟に庄右衛門がおり、

上綿屋を号したが、享保14年没しており、上綿屋は一代で終わっている。しかし、庄右衛門は一時期、かなり経済的にも勢いがあった。田部家9代の安右衛門が元禄5～9年ころ、家屋敷を次々と購入していたころ、庄右衛門も元禄10年の8月と10月、さらに同17年3月に合わせて3軒の家屋敷を購入している。また、「鉄山旧記」で享保11年(1726)松江藩の鉦を10カ所に定めた時、綿屋鍋助(田部家11代・祖右衛門)は2カ所許されたが、庄右衛門も1カ所許されている。

ところが、享保14年に庄右衛門が亡くなり、その子松之助はまだ幼少であったため、頓原綿屋・与次兵衛の子、善八が養子に入った。しかし享保18年9月には「先年養父庄右衛門より石見屋借銀方江当分質物に入置申鉄山」も手放さざるを得なくなっていた。善八は、与頭甚左衛門に対し、「実父与次兵衛家督猶以相続得不仕候」と述べ、与次兵衛も「御米代式拾貫目不納仕候得共、御憐憫ヲ以年賦ニ被為仰付」たばかりであったため、とても援助する余力はなかったのである。

享保18年11月の「口上覚」によると、「養父庄右衛門代より之借銀殊ニ近年御拝借銀并ニ新借大分出来仕」、返済するあてもなく、既に潰れるしかない状態であり、善八は実家の頓原へ「逼塞」した。その後、上綿屋の手代、孫右衛門と善五郎は、本谷鉄山と杉戸鉄山を前綿屋に質入れして借銀し、「鉄山家蔵諸道具」は御札方質入れとし、上綿屋幼年の松之助を養育することを綿屋長右衛門と土屋半十郎に訴願している。

この時の庄右衛門の借銀は、石見屋のみならず、大坂、宍道、三刀屋にもあり、二人の手代は、これらをも綿屋長右衛門と土屋半十郎が「年々ニ御指引ヲ以調申様」にお願いしている。

この享保18年時点で、綿屋長右衛門は一族の長として確固たる地位を築いたものと思われる。木ノ下の金屋子神社の立派な鳥居は元文5年9月に建てられているが、10代・田部長右衛門元年と11代・同祖右衛門の銘が刻まれている。綿屋の並ぶものなき存在になっていることを如実に示している。

(以上、(1)から(5)までは、「近世前期の田部家とたたら経営」(島根県古代文化センター編『山陰におけるたたら製鉄史の比較研究』2011年8月発行予定、所収)に述べている。

(6) 鉄座の設置(幕府の鉄専売)

安永9年(1780)から天明7年(1787)まで幕府によって鉄座が設置され、幕府による鉄の専売制が実施されるが、それがたたら製鉄業者にどのような影響を与えたかを明らかにすることができた。その第1点、天明5年(1785)、田部家は経営の危機に陥り、藩に借金を返済

できず、家督のすべてを藩に取り上げられる。第2点、寛政10年(1798)田部家をはじめほとんどのたたら製鉄業者は大坂問屋におおきな借金をし、藩の援助をうけた。そして田部家は再び松江藩にすべての家督を召し上げられた。

田部家は、文政13年6月19日にも大火に見舞われ、大きな痛手を受けている。すなわち、吉田町の和四郎方より出火、竈敷21軒が焼け出されたが、この時、田部家は類焼をまぬかれたが、田部家の貸家15軒と分家下綿屋(佐一右衛門、本家に養子に入る)の居宅、土蔵、納屋、湯殿、雪隠とも残らず類焼している(文政11年「諸御用附込」—文化5年「鉄山殿合一巻」に所収)。

このような苦境から田部家は再建されていくが、再建できた大きな要因は、鉄農具が広く使用されるようになり、鉄需要が東北・北陸に拡大していったこと、田部家が藩の指導もあり、鍛冶屋業を拡大させ、半製品としての銚(ずく)の生産から完成品としての割鉄の生産に重点を置いたことであることを明らかにした。

(7) 弘化4年(1847)田部家の苦境

弘化4年の田部家のたたら経営における苦境の要因を推し量るものとして、近年の堀江映月による研究成果「近世後期の鉄価と社会状況—広島藩佐々木家の経営分析を中心に—」(『史学研究』第270号)がある。それによると、史料に基づきながら「銀札の価値の下落により、諸品が高騰し、同時に鉄山労働者の賃金や駄賃も増長し」、「鉄山経営では山内に大量の米や諸物資を供給し、また製品である鉄を市場へ送り出すことも必要であるが、その運送は多くは周辺村落の農民の仕事であった。物価の高騰に加え、労賃・運搬費も上昇するこの状況は鉄山経営にとって非常に苦しかったに違いない」と分析している。その結果、広島藩を代表するたたら経営者佐々木家の経営は悪化したと結論づけている。広島藩ならず、松江藩においてもそれは同じであった。

田部家は、弘化4年(1847)にも藩によって家督を差し押さえられ、藩の勝手方がこれを管理することになったが、今回の研究によってその詳細を明らかにすることができた。それは、相良英輔編著『松江藩鉄師頭取 田部家の研究』(島根大学平成21年3月発行)に掲載している。

(8) 幕末の好調なたたら経営

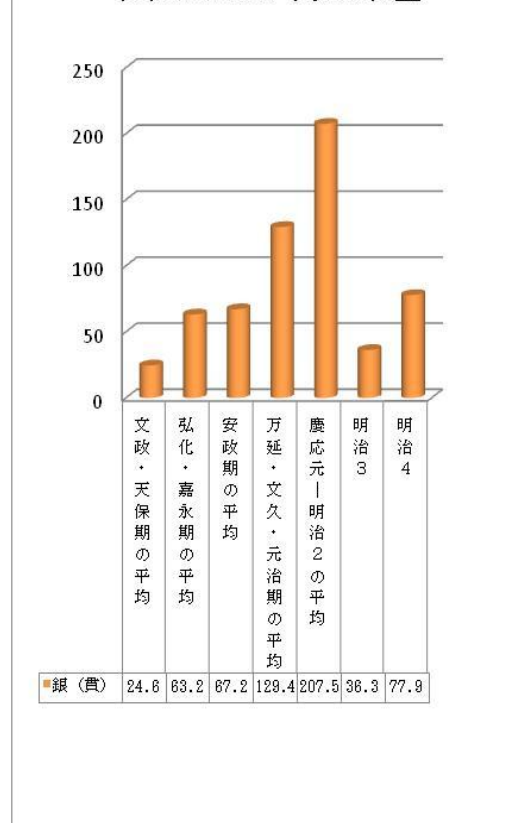
幕末の緊迫した世情のなかで、軍需品などの原料として鉄の需要が急拡大し、田部家は大きな利益をあげ、松江城下にも借家・土地などの資産を拡大していったことを明らかにした。しかもそれは生産量が拡大したので

はなく、価格の上昇によって売上高が伸びているのである。

「文政9年以降鑪方勘定出目銀座写」は文政9年(1826)以降の田部家のたたらにおける生産量、売上高、利益などを計上したものであるが、そのなかで、特に菅谷鑪は経営がもっとも安定しており、他の鑪が損失を出しているときでも常に利益を計上している。しかも統計が比較的そろっている(相良英輔編著『松江藩鉄師頭取 田部家の研究』(島根大学平成21年3月発行)所収)。しかしそれでも半分近い欠年があるが、年次別の傾向は充分説得力のあるものである。

菅谷鑪における文政・天保期の統計の解かる年の売上高と利益の年平均は、銀101貫匁と24貫匁、天保11年から嘉永6年の平均では、125貫匁と63貫匁、嘉永7年から安政6年では、170貫匁と67貫匁、万延・文久・元治期では、265貫匁と129貫匁、慶応元年から明治2年までは、469貫匁と207貫匁である。利益のみを示したものが下図である。幕末の利益の急激な上昇をはっきりと示している。特に元治元年から明治2年までの急上昇は際立っている。

菅谷たたら年次別利益



この時期の売上高は、文政・天保期ころの 4 倍以上、利益は 8 倍以上である。生産量にそれほどの変化はないから、鉄価格の上昇が莫大な利益を生んだのである。このようにたたら経営は、幕末、特に元治、慶応、明治 2 年までに大きな利益を上げたのである。その後は、需要の減退、労賃の高騰などもあって、売上高、利益ともに激減していく。このことは今日までのたたら研究でも明らかにされていないことである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- (1) 相良英輔 「全国一の製鉄県・島根県と鉄師頭取田部家」(小和田哲男監修『戦国日本』郷土出版社、313 頁(1 頁分)、査読なし、2009 年 12 月、所収)
- (2) 相良英輔 「近世後期たたら設備の貸借と契約―「懸り受け議定」の分析」(広島経済大学『経済研究論集』第 32 巻第 4 号、81-85 頁、査読なし、2010 年 3 月)
- (3) 相良英輔 「近世前期の田部家とたたら経営」(島根県古代文化センター編『山陰におけるたたら製鉄史の比較研究』、10 頁分、査読なし、2011 年 8 月発行予定、所収)

[学会発表] (計 2 件)

- (1) 相良英輔 「松江藩鉄師頭取田部家の文書概要―田部家文書調査から知りえたこと―」(鉄のフォーラム 2009 (島根県雲南市・鉄の歴史村地域振興事業団主催、2009 年 11 月 14 日、吉田健康福祉センター)
- (2) 相良英輔 「近世前期の田部家とたたら経営」(「参院におけるたたら製鉄史の比較研究」検討委員会、島根県古代文化センター、2010 年 12 月 23 日)

[図書] (計 1 件)

相良英輔 編著『松江藩鉄師頭取田部家の研究』(島根大学、2009 年 3 月発行、195 頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

相良 英輔 (SAGARA EISUKE)
広島経済大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：70124071

(2) 研究分担者

山崎 亮 (YAMASAKI MAKOTO)
島根大学・法文学部・教授
研究者番号：40191275

濱田 敏彦 (HAMADA TOSHIHIKO)
広島経済大学・経済学部・教授
研究者番号：80330653
諸岡 了介 (MOROOKA RYOUSUKE)
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号：90466516

(3) 連携研究者

()

研究者番号：